

東京大学数物連携宇宙研究機構棟

正会員 大野 秀敏 君

「東京大学数物連携宇宙研究機構棟」は、東大柏新キャンパスの帯状広場北側に林立する研究棟のひとつである。作品は、構成要素の「2つの対化 (A、B)」の重なり合いのうちに統合され、フォームが具体化されている。

A：上階（3、4、5階）と下階（1、2階）との対化。上階に研究者の活動空間、下階に研究支援のための諸室（図書室、セミナー室、大講義室、実験室、事務室など）が配される。下階は、上階の活動を支える基盤とみなせる。

B：包囲されるものと包囲するものとの対化。上階中央に、3層吹き抜けの大空間が開かれる。そこは、研究者たちが自由に討議する空間である。設計者が「都市広場（ピアッツア）」を思い描く空間であり、「作品世界」を具現化する「可能的な場所」である。そして、「僧院の僧坊」を想起させる個室群（3層、77室）がピアッツアを包囲する。

ピアッツアの「空間構成の手法」は多面的である。設計者の企てを列記すれば、以下のとおりである。①ピアッツアの西側に「階段状坂道」の設置。3層構造の個室群がピアッツアの周囲に螺旋状に配され、ピアッツアと個室群との一体化が目論まれている。②ピアッツアのフロアーに、開放的なセミナー室の設置。③バルコニーと名づけられた2つのラウンジ（4階、5階）の設置。④ピアッツアの南側にロτζアの設置。⑤黒板、空調機が組み込まれたヒューマンスケールの家具の設置（3カ所）。上記の諸要素の統合により、ピアッツアにおける空間的な活性化が実現され、「居心地のいい内部」が具体化されている。

立面構成は、市松状のコンクリート開口部が基本。端正な古典的表現である。正面には2層分のコロネードが付設。これはキャンパスの共通おさまり。西壁面では螺旋状の個室配置の表現。屋上には、ランドマークとしての巨大なパーゴラ（野外劇場の舞台プロセニウム）が設置されている。

本作品は、研究施設としてのフォーム力、デザイン力、そして家具を含む細部の力をあわせもち、また、建築家がこの「設計」(projections)に込めた「空間力」という建築作品における「第一のもの（初源力）」が、さまざまな制約条件のなかで現前化されており、その企ては高く評価できる。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。